



からしだね

2018年11月号
(543号)

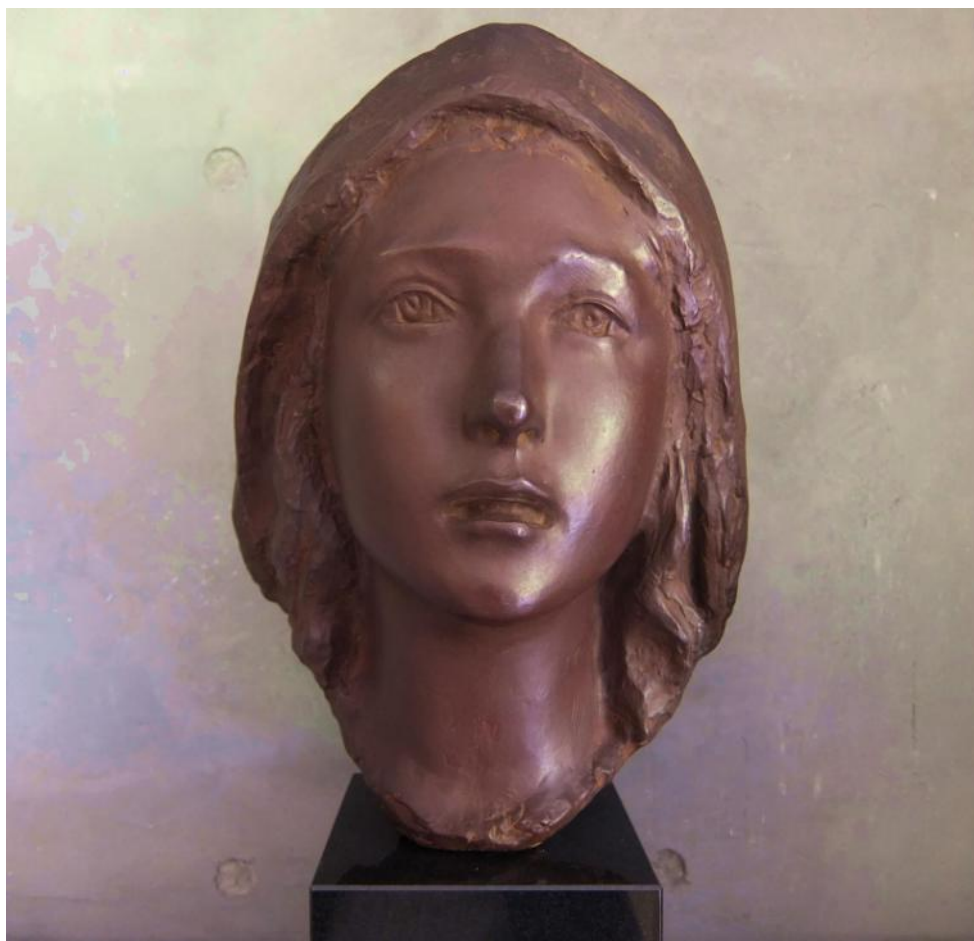
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/>



聖ヴェロニカの彫像 舟越保武作

本号の記事の主題など

秋のバザーは大盛況
敬老の集いに40人
大人の日曜学校だより(9月)
國井健宏神父様からの手紙
冬に備えて教会樹木の剪定
池田教会で育つ樹木一覽

みんなの談話室
偕老同穴を越えて、聖モニカの聖徳
お薦めシネマ「人生フルーツ」
俳句
11月25日に待降節の黙想会
クリスマス会にプレゼントの提供を！

秋のバザーは大盛況

今年の秋のバザーは聖マリア幼稚園の「まりあまつり」と同時開催だったこともあって、大盛況だった。バザー実行委員会の前々からの入念な会議、当日までの食品関係の準備、雑貨の仕分けや値付けなど、さまざまな奉仕の積み重ねのもとに開かれたバザーは、どちらを向いても笑顔ばかりで、恵みあふれる秋晴れの日となった。

カール記念館を会場としたバザーの各ブースの提供品と担当した委員会や日曜学校のグループを簡単に紹介しましょう。

玄関入口脇

中高生会のブースではお兄ちゃん・お姉さんたちが作る綿菓子を園児たちが列を作って待ちました。

玄関ホール

扉を開けると総務委員会メンバーが訪問者に靴カバーを配って靴のまま入館するのを手助けし、上りがまちに近いところにある「東条湖の家」の賛助ブースの手作りのジャムの瓶詰めなどが提供されていました。その向かいにある社会活動員会のブースにあった東日本大震災で津波被害を受けた支援先釜石の特産の農水産物はほぼ完売されたようです。

玄関ホールの奥

日曜学校ブースでは若い父母と先生、サポーターたちが故デニス神父様伝授のホットフランクに列待ちができました。

一階ホール

地区委員会ブースのカフェテリアではカレーライスやおでん、おにぎり、手作りケーキと飲み物のセットが提供され、飲食と会話を楽しむ人々でテーブル席は満杯でした。

二階の和室と会議室

社会活動委員会の蚤の市と古着市では、笑顔のお母さんが大きな紙袋を両手に持って、なお、宝物を探しておりました。

バザー2018

We are happy to serve you

～私は仕えるために来た(マルコ 10:45)～

収益の一部は北海道地震・東日本大震災復興支援と貧しい国の子どもの教育支援に寄付します

日時 2018年10月21日
10:20 ~ 13:30

場所 カトリック池田教会
カール記念館

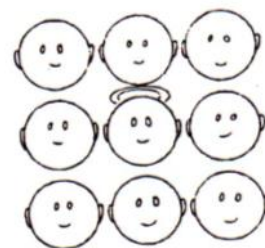
同時開催: まりあまつり(カトリック聖アリア幼稚園)
10:00~13:00

Hello! I am Fr NONOY.
Please be there at our
Bazaar. Enjoy!
バザーにお越しください

おでん・おにぎり・カレーライス
ホットフランク・手作りケーキ・紅茶
コーヒー・綿菓子・のみの市・古着

主催: カトリック池田教会バザー実行委員会

“仕えるのが嬉しい” 実行委員会のポスター



…チームワークが上手



敬老の日、おめでとうございます。長年にわたり教会につくしてこられた皆様に敬意をもって9月16日のミサ後に敬老の集いを準備させて頂きました。

ミサが終わってからカール記念館で集まり歌を歌い「神父様のスライドショー」を見てもらいました。そしてひよこ豆入りのカレーを配膳しました。75歳以上の方には自己紹介と一言を言って頂きました。最後にまた歌を歌って畠神父様からお祈りをしてもらい終了しました。参加人数は40人ぐらいでした。

この集いが皆様の若返りと今後ますますのご健康とご長寿に少しでも役立ちますよう、心よりお祈りしております。

地区委員会委員(宝塚地区、その他地区)

高齢者からの感謝のことば

ミサの後半、「75歳以上の方に司祭の祝福があります」との声に、わらわらと立ち上がるわれら高齢者たち。ミサにあずかる人々の3分の1の人数に及ぶのではなかろうか、と驚く。畠神父様に按手をしていただき、心の平安を得た。これでまた一年間神様の愛に抱かれて過ごせる。ミサ後には若い方々やほぼ若い



方々により、心のこもった敬老の集いが催された。池田教会で献身的に働かれた今昔の神父様方の若々しい写真の数々に見入る。ああ、過ぎ去った時、懐かしい時代。昔の聖歌を歌った。そしてひよこ豆入りカレーの昼食。自己紹介の機会が設けられ、これまで個人的にお話したことがないお顔にも親しみが増した。最後に心づくしの饅頭とノイ神父様よりの聖句のお土産。来年はわれら高齢者がおもてなしをして、日頃の皆様のお心遣いに感謝するべきではなかろうか、と妄想しながら、感謝の祈りを唱えた。神と皆様に感謝。

Y.N.

大人の日曜学校だより

9/23 福音の分かち合い

「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです」

使徒ヤコブの手紙3・18

この日は少し第2朗読の話にもなりました。ミサ中の第2朗読でよく読まれる聖パウロの書簡が時として神学的であるのに対し、この使徒ヤコブの手紙、その内容は、非常に倫理的(あるいは実践的)であるのがとても印象的だったからです。

そこで今回は、そんな実践的な話として、大人の日曜学校で以前、話に出た、ちょっとしたエクササイズをご紹介します。やり方は簡単です。

1. まず、ご自分が日頃、気に入らないこと、腹の立つこと、我慢ならないこと、断じて受け入れられないこと(人でもけっこうです)を何かひとつ(誰かひとり)思い出してみてください。

2. そしたら、そこでゆっくりとひと呼吸おいてください。そのあと、次で、頭の中で「それでいい。」そう、言ってみましょう。すると、どうなるでしょう？

3. では次に、「自分は人の目ばかり気にして、いつも不安定で、自信のない人。」そう、自分をイメージしてみてください。

それから、また、ゆっくりとひと呼吸おいてください。そしたら、もう一度、「それでいい。」そう、ゆっくり頭の中で言ってみましょう。すると、何が起きるのでしょうか？

研修委員会

國井健宏神父様からの手紙

池田教会の主任司祭だった國井健宏神父様が、東京へ赴任なさったのは、1995年の春でした。東京へ着かれてまもなく、池田教会の信徒へ宛てて、国井神父様からお礼の手紙が届きました。感性豊かな國井神父様のお人柄が偲ばれるので、再録して紹介いたします。

十 主の平和

いつの間にか初夏が近づいています。五月山や、能勢の山々も、やがて見事な新緑に輝くことでしょう。移り行く時の流れとともに、7年近い池田での生活も過ぎ去りました。目の前から見えなくなった池田の山々が、そしてその風景が包みこむ池田教会の皆さんが、無性に懐かしくなります。長いようで、短い期間でしたが、ほんとうにありがとうございました。

4月20日の朝7時に車で出発し、天王山トンネルの渋滞には会わずに中央道を行いました。中央道に入ってまず目に付いたのが北に白くそびえる御嶽山でした。そのうちに東には南アルプス、西には駒ヶ岳の山がまだ深く雪に覆われ、緑の濃くなる麓の山とは対照的に季節の変わり目を見せていました。春の日を浴びた農家は木蓮やボケ、レンギョウや山桜や桃に囲まれ、祝福に満ち足りた顔をしていました。諏訪湖を過ぎてハケ岳の麓あたりから目の前に富士山が霞んだ姿を現しました。北から見ているので、右手の手前あたりが上九一色村・・・こんなきれいな自然の中に、人間だけが破壊と汚れを持ち込んで、と考えさせられました。

小教区から修道院への生活のリズムの変化は、かなり大きいので、慌てずに調整したいと思っていますが、新しい責任を果たしていけるよう、まずは心身ともにリフレッシュしなければ、と思っています。東京に来てからの3日間はやたらに眠たくて、片付けも手につきませんでした。やっと冬眠ならぬ、春眠から起き上がるかというところです。考えてみれば、ほんとうに至らない所だらけの人間を、皆さんがご好意をもって支えてくださり、補ってくださり、共同体として楽しく、心豊かな日々を過ごすことができました。まことにありがとうございました。もちろん楽しいことだけではありませんでしたが、辛いことをともに分かち合うことから、ずっと強い連帯感

が生まれます。

まずは未完成のままだった本の原稿をまとめたと思っています。それから6月には管区会議のために10年振りにアメリカに行く予定です。その後はもっぱら上智大学の授業の準備と典礼委員会の仕事に時間を取られることでしょう。皆さんもどうぞお元気で、お体大切に、デニス神父様とBr.雲田と協力しながら、主のお恵みのうちにお過ごしください。

近いうちに再会できることを望みながら、一筆御礼もうしあげます。

1995年4月25日

國井 健宏

冬に備えて教会樹木の剪定 10/23

池田カトリック教会のある池田市は本年、7月から8月上旬にかけての異常な高温、隣接県の姫路市を通過した20号(8/24)、神戸市を通過した21号(9/4)、田辺市を通過した24号(9/30)の三つの台風による暴風雨に曝され、6月18日には大阪府北部を震源とする震度5弱の地震に見舞われました。吹き付けられた雨は池田教会のカール記念館一階の床に壁の隙間から侵入し、地震にとって聖堂のガラス数枚が破損しました。また、7月から8月の高温によって教会中庭にある針葉樹のモミの幾つかの枝と2本の古木が枯れました。

高温と多量の雨が、逆に、幸いだったのは、海岸で育つビャクシンの園芸種である生垣のカイズカイブキや南国育ちのソテツ、アダンなどで、いずれも樹は成長し、数を増した葉の緑色は濃くなりました。常緑広葉樹の雌のモチノキの上位の枝には沢山の実が付きました。

迎える冬季の気象に備えて教会の中庭と東西の公道や聖堂南壁に面して生える樹木に対して10月23日(火)に剪定が行われました。それは厳しい暑さや強風に曝されて傷んだ枝や下向きの枝、重なり合うように育った枝、主幹の成長のためにひこ生え株などを切り詰めて、枝葉に水や光、酸素、二酸化炭素を十分供給し、乾燥した大気に葉から水蒸気が蒸散しすぎないように葉を減らすことが目的です。写真にあるように、葉や小枝が落とされてやや寂しい姿を呈しています。東側の公道に沿うカイズカイブキの生け垣に対しては公道に

はみ出た枝を除いて歩行者を傷つけないようにし、上部の多すぎる枝葉は下部の枝葉に光を通せるように間引かれました。切られた枝葉の嵩は90リットルの半透明のビニール袋30個に詰められるほどでした。これら袋は5袋ずつ教会東側公道に置いた置き場から、水曜日から土・日曜日を除く6日間の午前中に、契約した業者によって池田市の廃棄物処理場に運ばれて処理されました。

剪定作業を行ったのは池田市シルバー人材センターからの3人技能者、袋詰めや清掃を行ったのは9名の信徒

のボランティア、昼食などを調理したのは4名の信徒のボランティア、総勢16名でした。



池田教会で育つ樹木一覧

中庭の樹木 (カッコ内には漢字名)

- クスノキ(樟)
常緑高木(20呎以上)、雌雄同株。5月に白色花、秋に黒紫の実。教会最大の樹高。
- モチノキ(鶯の木、2株。大株は雌？小株は雄)
常緑高木(20呎以上)。雌雄異株。新枝の葉柄の付け根(葉腋という)に花芽が晩秋に生まれ、翌年冬に果実が赤色に。木肌はなめらかで灰白。
- イヌマキ(犬槇)
常緑高木(20呎)。雌雄異株。玉飾りで健康美。
- モッコク(木斛)
常緑樹(10呎)。ふつう両性だが、雌雄異株。肌はなめらかで灰淡褐色。葉は濃緑、葉柄が赤色。
- キンモクセイ(金木犀)
中国から渡来した常緑広葉樹。10月始めに橙色の小花を咲かせ、香りで秋の到来を知らせる。
- ソテツ(蘇鉄、3株)、○ウメ(梅)
- モミノキ(樅)
常緑針葉樹。15呎以上。北海道南部から九州まで成育。盛夏には水遣りと日陰で保護。
- ナンテン(南天、3株)
木質の茎を持つ草本。細く真直ぐに育ち、赤い実。
- サザンカ(山茶花)
常緑低木。11月から3月の長期間に亘って開く。チャドクガの幼虫が新葉を好むので要注意。
- アオキ(青木、4株)
常緑低木。雌雄異株。雌株は4月に紫色の花を咲かせ、初冬に赤い実をつける。日陰でも育つ。葉は対生。

- サツキツツジ(臯月、11株)

ツツジより小さい葉と花を持ち、剪定に強く、庭の樹木として小径の両脇に植えられている。

西側公道に面した樹木

- アラカン(粗榿、3株)
常緑高木(20呎)。雌雄同株。黄色の花、秋にどんぐり。棒の如く数本の幹が出る棒立ちが見事。
- アダン(阿檀)
常緑低木。亜熱帯から熱帯の海岸近くに生育する。
- クロガネモチ(黒金鰐) 常緑高木。雌雄異株。洗濯干場の雄株は赤い実を付けない。
- キンモクセイ(金木犀)

東側公道に面した樹木

- カイヅカイブキ(貝塚伊吹、生垣)
海辺に自生するイブキ(ビャクシン)を挿し木で増やし、濃い緑色の柔らかな葉に変身させて、生け垣に用いられてきた。枝先が真直ぐではなく火炎状に成長するので、その先端枝の透かし剪定を行って、生垣の下部の枝にも光や風を当てるようにする。
- ソメイヨシノ(染井吉野、2株)
クローン種であるので、通常は実(サクランボ)を付けず、樹齢は50年から60年と短い。

聖堂の南側の樹木

- ツバキ(椿)
花の華やかさと色が昔から日本人に好まれてきた。春～夏に葉の裏で孵ったチャドクガの幼虫はその葉を好む。
- エゾマツ(蝦夷松)
常緑針葉樹。モミノキに似た葉の長さは1呎程度と短い。樹長もさほどない。 広報 T.O.

みんなの談話室

偕老同穴を越えて 聖モニカの聖徳

大山

「偕老同穴」は「一夫一婦」と共に、福沢諭吉が強く提唱した結婚の理想です。

『詩経』 (?風・擊鼓と王風・大車より)

執子之手 (子の手を執りて)

與子偕老 (子と偕〔とも〕に老いん)

穀則異室 (穀〔い〕きては則ち室を異にするも)*

死則同穴 (死しては則ち穴【墓】を同じうせん)。

*穀は穀物の穀ですが「生きる」という意味もあります。

ところで聖アウグスチヌスの母、聖モニカ (Monica, 331年 - 387年) が、この「結婚の理想」を、初めは強く追求したのに、後になってきっぱりと放棄したのです。さらに高い理想を目指したのです。

聖モニカは、北アフリカのタガステ (今のアルジェリア) で生まれました。結婚した相手はパトリキウス、口で言うより手の方が早い、DVたえない乱暴者。放蕩者だったそうです。

また息子アウグスチヌスは、異端のマニ教に陥り、女性と同棲して一子をもうけ、改心を迫る母を煩がり、アフリカの海岸に、騙くらかして置き去り。ローマに出奔しました。

モニカは、動力も無い当時の木造船で、地中海を横断する際、大風に怯える船員らを鼓舞激励。遂にローマからミラノに到着。アウグスチヌスに追いついて、司教聖アンブロジオから洗礼を受けさせました。

かくして一家揃って故郷の北アフリカに帰る途中、モニカはローマ郊外の港町オスチアで死去しました。

その次第は、聖アウグスチヌスの「告白」に描かれています。(山田晶氏訳・「世界の名著」14中央公論社)。以下に引用しますが長くなりますので、一部を省略、その箇所を……の記号で表しました。

9巻10章26節より 母の遺言

『……わが子よ、私はといえば、この世の中にもう自分を喜ばせるものは何もない。……この世にまだしばらく生きていたいとのぞんだ一つのことがありました。死ぬ前に、カトリックのキリスト者になったおまえを見たいということだった。神様はこの願いを十分にかなえてくださった。……もうこの世で何をすることがありますよ』

聖モニカは、息子を改心させただけでなく、それ以前に、苦しい忍耐を通して、気難しい姑と和解。また、夫のパトリキウスには死ぬ直前、洗礼の恵みに浴させました。

9巻第11章27節～28節より 母の死

『27……それから5日たつたないうちに、母は熱を出して床についてしまいました。病の間、ある日のこと、気絶して、しばらくまわりのものがわからなくなりました。私たちはかけよりました。しかし、ほどなく意識を回復し、かたわらに立っていた私と弟(ナヴィギウス)を見つめて、何かたずねる様子で、「どこに私はいたのでしょうか」といいました。

それから、悲嘆にくれている私たちをじっと見つめて、「お母さんをここに葬っておくれ」といいました。……弟は何かいって、母を旅先ではなく故郷で死なせたいというような希望をもらしました。それを聞くと、彼女は心配そうな顔つきになり、なぜそんなことを考えるのかと目で弟を叱って、それから私を見つめ、「まあ、何というのだろう」といいました。それからまもなく二人にむかい、「このからだはどこでも好きにどこに葬っておくれ。そんなことに心を煩わさないでおくれ。ただ一つ、願いがある。どこにしようとも、主の祭壇のもとで私を思い出しておくれ」こういった意味のことを、そのとき彼女にできたことばで述べてからあとは黙ってしまって、つのりくる病のもとに苦しんだのでした。

28……私は、母がいつも墓についてたいへん心をつかい、夫の身体のかたわらに葬られるようあらかじめ手配し準備していたことを、よく知っていました。

じっさい、二人は非常に仲よく暮らしましたが、さらにこの幸福の上に……海をこえた旅路

の後、二人を結びつけていた共通の土（「同じ故郷の同じ墓場の土」の意味）で二人に土がおおわれることが許されるという幸福が付け加えられ、（さらに）語り伝えられることをのぞんでいたのです。

けれどもこのようなむなしい考えは、いつの間にやら、あなたのいつくしみが充満するにつれて母の心から消えはじめました。……また後になって聞いたところによると、すでにオスチアに来てから、ある日私が不在のとき、母はわたしの友人たちのある者たちと、この世のむなしさ、死の善きことなどについて母親らしい確信をもって語りあい、彼らがこの女性の勇気……に驚いて、故国からそんなに遠くはなれたところに身体を残すのはこわくないかとたずねると、「神様からは遠くありません。世の終わりに神様が、どこからよみがえらせたらよいかご存じないとこまるなどと心配する必要はありませんよ」と答えたそうです。このようにして、病んで九日目、母の五十六歳、私の三十三歳のとき、その信仰深い敬虔な魂は、身体からときはなれたのでした』。

さて今、池田教会では、納骨堂を移転するため、係の方が懸命に努力しておられます。何度も市役所に足を運び、また納骨堂の所有者の意見を汲み取る。

私は、うまく事が進むよう、心から祈るものです。お墓は極めて重要です。これがないと親や祖先の存在を忘れてしまうことがあります。親や配偶者、また子供の死を体験。信仰が甦り、墓所を設け、教会に復帰する例は沢山あります。もし墓所の必要を痛感しているのに、確保できない場合は、どうすればよいか。

私は聖モニカを思い出したのです。昔読んだ「告白」を繙きました。この2聖人、余りにも偉大！この真似は到底できない。私が、ここで『告白』を、長々と引用したのは、この偉大な親子の並外れた聖徳に、改めて感動したからです。

本来の意図は、墓所を必要としているのに、得られない場合は、どうしたらよいか。聖モニカがヒントを与えてくださるだろう、というものでした。それから逸れてしまいました。

しかしながら失望は絶対禁物。憐れみ深い神様は、勇気ある聖モニカの取り次ぎで、徳の高い人には墓所がなくても、何か良い方法を教えてください。また我々のような罪深い凡人……恨み、妬み、仇返し、怒り、喧嘩、口論、辱め、そしり、讒言、嘲りなど、欠点のつぼを、心中に抱える罪人も、それなりに努力すれば、神様が相応しい手段で助けてくださると、確信しています。



お薦めシネマ(ドキュメンタリー)

人生フルーツ

ある建築家夫婦と雑木林のものがたり

TONBO

「むかし、ある建築家が言いました。家は暮らしの宝石箱でなくてはいけない。」

先日、亡くなられた樹木希林さんがナレーションをするこの言葉でこの映画は始まります。名古屋の郊外、高蔵寺ニュータウンの一角に雑木林に囲まれた一軒の平屋があります。建築家の夫・津

端修一さん(90歳)が300坪の土地に自ら設計して建てた家です。師であるアントニオ・レーモンドの自邸に倣って建てた家は32畳のワンルーム(次ページの写真)。玄関はなく、庭から居間に入り、天井は吹き抜け、建具を開放すると四季折々の景色が目飛び込んできます。まるで宝石箱のよう !!

妻・英子さん(87歳)は庭に70種の野菜と50種の果実を育て、美味しい料理を作ります。裁縫・刺繍・編み物・機織りとなんでもこなす可愛い



おばあちゃん。英子さんは造り酒屋のお嬢様として何不自由無く暮らしましたが、結婚した修一さんは、東大工学部卒業後、日本住宅公団に入り気鋭の建築家でしたが退職。その後、大学で教鞭をとっていましたが、大学と意見があわず退職。給料が入ってこない生活がつづきます。おまけに修一さんは大のヨット好き！学生時代から続くこの趣味はけっこうお金がかかります。お金のない津端家は始末・工夫を大事にし英子さんの涙ぐましい努力で家計をささえます。

二人で枯葉をかき集め、堆肥にして庭に撒き、畑を耕し、種を撒き、水を与え、雑草を抜き、花を咲かせ、実がなれば収穫し、漬け込んだりお酒にしたり…。(池田教会にもそれに似たような人がいるような…?)

結婚して60年。手間暇を惜しまず、コツコツと時をためてゆっくりゆったり、二人は暮らしていきます。戦中・戦後の激動の時代を生き抜き、常識にとらわれず个性的に暮らす二人の姿は、私達に工夫をして手をかけて暮らす楽しさと人生で大事な物は何かを教えてください。美味しい料理もたくさん出てきます。

風が吹けば 枯葉が落ちる。
 枯葉が落ちれば 土が肥える。
 土が肥えれば 果実が実る。
 こつこつ ゆっくり 人生フルーツ。

※2015年6月、修一さんは、いつものように朝から草刈りをして、疲れたからとベッドに横になられそのまま天国に召されました。(享年90歳)

修一さんと樹木希林さんのメッセージがこめられた作品を是非ご覧ください。

アンコール上映のお知らせ…「シネ・ピピア売布」阪急宝塚線売布神社駅前、Tel 0797-87-2261、11月24日(土)～30日(金)、上映時間はご確認下さい。



テレジア

柿ひとつ 落つる音して 闇深む

柿すだれ 兄いもうとの 口喧嘩

11月のガラスケースのことば

心の中のかくれた人柄をかざりにしなさい

ペトロ 第一 3・4

2018年度 待降節の黙想会

指導司祭 清川泰司神父 (高槻教会)
 日 時 11月25日(日) ミサ後
 テーマ 受肉した神の御心
 研修委員会

11月の教会カレンダーへの追加

11月8、15、22、29日(木) 10:30
 聖書百週間
 11月9日、30日(金) 14:00~16:00
 福音書を学ぶ会
 11月4、11、18、25日(日) 13:00~14:30
 信仰入門

ドレミの会 クリスマス会(12/8)に プレゼントの提供を!

皆様のご理解のもと27年という長い月日、無事に楽しい活動が続けることができ、いつも感謝しております。

12月8日(土)恒例の「クリスマス会」が行われます。子供たちに渡すプレゼントを提供していただけますか!

現在、30名ほどの様々なハンディーを持った方が参加しています。お家に眠っている小物などがありましたらご寄付ください。プレゼントですので、未使用の品をお願いいたします。

年齢は20代、30代、が中心ですが40代、50代の方も小学生も少しいます。男女は半々くらいです。バザーが終わったばかりなのに申し訳ありません。

カール記念館1階の和室に段ボール箱を置きますので、その中に入れてください。12月8日、午前中まで受け付けています。楽しいクリスマスが迎えられますように、ご協力をお願いいたします。

ドレミの会

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■ 日帰り黙想会

■ 週末黙想会

以上の11月の黙想会はお休み

■ 韓国語による聖書の勉強会

11月と12月はお休み

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎797(84)3111



表紙の写真について

聖ヴェロニカの頭像 舟越保武 作

舟越保武(1912~2002)は戦後の日本を代表する彫刻家の一人である。岩手県生まれで、父親が熱心なカトリック信者だった。長男を亡くしたのち、洗礼を受けた舟越保武は、キリスト教に関連した彫刻を数多く発表した。最も有名なのは「長崎26殉教者記念像」である。晩年に脳梗塞を発症したが、リハビリを重ね、左手で制作を続けた。池田教会のイエス・キリスト像、ヨゼフ像、マリア像を制作された欠畑美奈子さんの叔父上にあたる。

舟越保武はこの聖ヴェロニカの頭像(小林聖心女子学院同窓会所蔵)に讃を寄せている。

傷悴の極みにあるキリストの死の道行きの終わりに近く路傍からつと進み出た一人の少女。苦痛にゆがんだキリストの御顔にあてたその白い布のまんなかには血と涙が印された。布を持って呆然と佇む少女の顔も涙にぬれていた。キリストの悲劇の最後に、清らかな一輪の花を捧げた少女の美しい心の記録はこのときから輝きはじめた。

アンジェリコ 舟越保武

広報委員会

編集後記

11月2日は死者の日である。いつもミサでは、復活の希望をもって眠りについたわたしたちの兄弟とすべての死者を心に留め、あなたの光の中に受け入れてください、と司祭とともに祈っているが、この日はわたしに近い死者を具体的に思い浮かべて、心の中で死者を立ち上げる。ふだんは意識の底に眠っている亡き父母の、命あふれていた声、姿、仕草を思い出す。それにしても祖父母、両親、親類、友人、そして神父様がたなど、なんと数多くの人々と出会い、別れてきたことか。人類が誕生して以来、どれぐらいの人数の死者がいるのだろう。兆の単位だろうか。その人々の魂を包み込む大きな光。裁きの日に義とされた人々のみ、というふるいがあるにしても。

ソフィー